

もくじ
 八宗兼学のひろがり … P1 展覧会に出品 … P3 あだち民具図典⑧
 ハエ取り棒 … P3 はい、文化財係です⑩ 常善院不動明王像の胎内文書 … P4

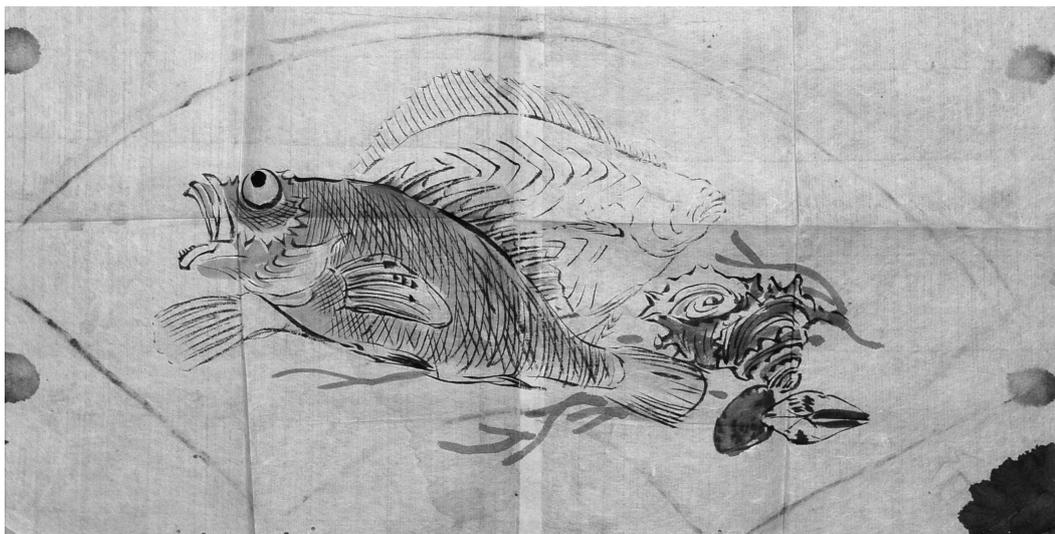


図1 船津家伝来粉本 魚貝図 紙本淡彩 まくり一枚
 足立区立郷土博物館寄託 船津家美術資料

足立史談

第 642 号

2021 年 8 月 15 日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

T E L 03-3620-9393

F A X 03-5697-6562

はっしゅう けんがく

八宗兼学のひろがり

—江北船津家伝来の粉本資料より—

加藤 ゆずか

江戸時代後期の絵師で、関東文人の代表格である谷文晁（たにぶんしょう・一七六三～一八四〇）は、狩野派や南宋画をはじめとした中国山水画、文晁とほぼ同時代に長崎を起点として全国各地に興隆した中国写実画派の南蘋派、更には西洋油絵や銅版画に基づく写実絵画まで、生涯一つの画風に固執することなく、古今の様々な画風を学習する姿勢をとり続け、文晁のこうした制作意識は「八宗兼学」と呼ばれました。

武蔵国足立郡江領上沼田村（現足立区江北）の豪農船津文淵（ふなつぶんえん・一八〇六～一八五六）は、そのような文晁の元で絵を学び、在郷の絵師として活動すると共に、文晁の画塾「写山楼」や、谷家に関わる膨大な資料群を引き継いでいました。この資料群は、「船津家美術資料」として足立区立郷土博物館に寄託され、今日まで伝えられるところとなっています。

「船津家美術資料」の中には、文晁および写山楼門下で共有されたと思われる絵の粉本、すなわち「粉本」（ふんぽん）も確認されています。総計二二六点にも及ぶ粉本資料の一部は、二〇一六年開催の郷土博物館特別展「文化遺産調査特別展 美と知性の宝庫足立 —酒井抱一・谷文晁とその弟子たち—」で展示し、紹介しました。

粉本の内容を概観するだけでも、南宋〜元時代の文人画家趙孟頫（ちようもうふ）の山水画や、琳派の大成者尾形光琳の菊図、南蘋派を広めた沈南蘋（しんなんびん）の花卉小蟲図などが確認でき、先に述べた多様な画派の学習を行った痕跡、まさに「八宗兼学」の姿勢が文晁の門下たちにも引き継がれていた様相をうかがうことができます。今回は、そんな船津家伝来粉本の内のある一点を、その原典を明らかにしながらご紹介します。

■蕙斎魚貝図の扇面化 紙本に扇面状に象られた粹線の中に、手前に緋魚（アコウダイ）が一匹、その後ろに鰈が一匹、そして二匹の魚の右隣には榮螺・あさり・蛤が一匹ずつ、細かな線描と淡い彩色で描かれています。魚貝図の下には海藻とおぼしき淡彩による線描が敷かれ、とれたての海の幸が広がる様が演出されています（図1）。

一見、何てことのない魚貝図ですが、実はこれらには、お手本となった原典が存在するのです。それが、江戸時代後期の絵師、鉞形蕙斎（くわがたけいさい・一七六四～一八二四）が、享和二年（一八〇二）頃に刊行した『龍乃宮津子』です。

鉞形蕙斎は、北尾重政の門に入り、はじめは「北尾政美」の名で浮世絵師として出発しますが、寛政六年（一

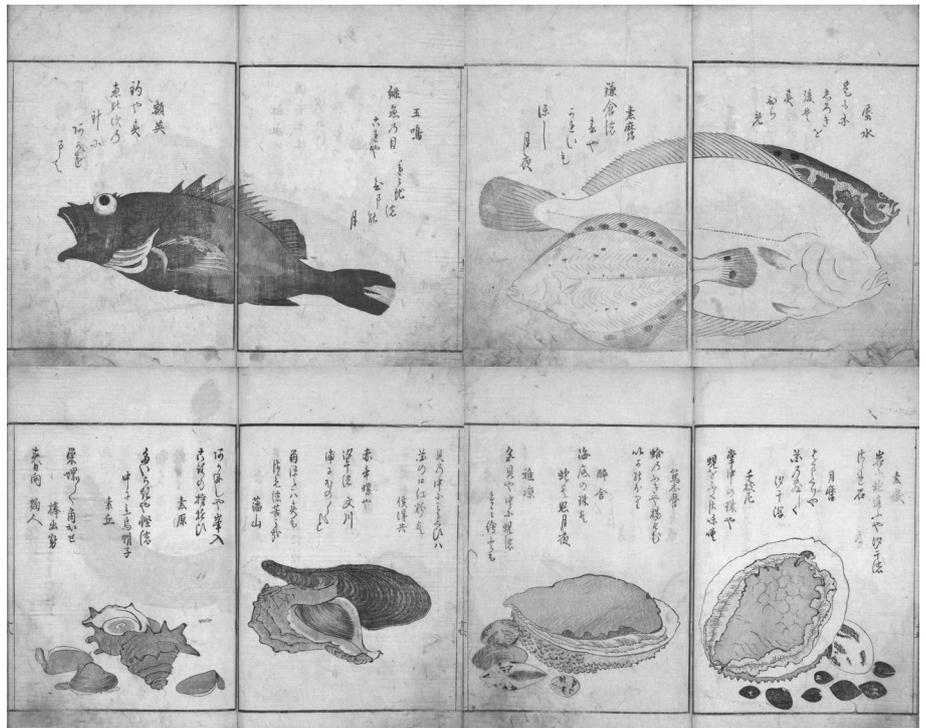


図2 鯨形蕙斎・一陽井素外『龍乃宮津子』
彩色摺 大本一巻一冊 享和二年(1802) 国立国会図書館デジタルコレクション

七九四)に、美作国津山藩(現岡山県津山市)の御用絵師に召し抱えられ、更に同九年(一七九七)年に江戸幕府の奥絵師狩野養川院惟信(かのうようせんいんこれのぶ)の門に入り、狩野派の絵師となるという異例の経歴を持っています。

『龍乃宮津子』は、蕙斎が描いた魚貝図に、江戸時代中後期の俳人一陽井素外(いちようせいそがい)

すれば、モチーフが反転していたり、『龍乃宮津子』のほうが豊かな彩色が用いられているなど、細部に相違点はあれど、両者はほとんど同じ図様で描かれていることに気づくでしょう(図2)。

そして、『龍乃宮津子』ではそれぞれ別な丁に描かれているものを、魚貝図粉本ではひとつにまとめていることから、この粉本は、蕙斎筆『龍

乃宮津子』の魚貝図モチーフを組み合わせて扇面仕立てにしていることがわかるのです。

■絵俳書から画譜、そして粉本へ
絵俳書『龍乃宮津子』は、本書が刊行された享和二年頃から文化十年(一八一三)にかけて、『魚貝譜』『魚貝略画式』と、書名を変えて再版を繰り返しているのですが、その際、上部に記された俳賛は省かれ、絵手本として再編成されています。

特に『魚貝略画式』という書名からは、鯨形蕙斎が寛政七年(一七九五)から文化十年に至るまでに断続的に刊行し人気を博した、『略画式』と名のつく絵手本シリーズの一つにして売りだしている様子がうかがえます。

「略画式」シリーズは、『略画式』から始まり、『鳥獸略画式』『人物略画式』『山水略画式』『魚貝略画式』『草花略画式』の計六冊の絵手本のことをさし、全冊を通して、神羅万象のあらゆるモチーフを網羅的におさめています。

こうした蕙斎の「略画式」シリーズは、江戸時代後期の狂歌師、鹿都部真顔(しかつべのまがお)の肉筆の画賛や、その他俳諧摺物に本書群と一致する図様が使用されていることから、狂歌師や俳人などが、絵を習わずとも簡便な狂画・俳画の揮毫を可能とする手本帖の役割を果たし

ていることがわかっていきます。したがって、元々俳書として刊行された『龍之宮津子』も、当時狂歌や俳諧を嗜む文人の間で人気を博した結果、「略画式」と名を付した絵手本として再版され、狂画や俳画の手本として好まれたと想定できるのです。

さて、そのような『龍之宮津子』(『魚貝略画式』)の魚図を組み合わせて扇面図様とした松津家伝来の粉本資料には、どのような意味があるのでしょうか。

まず書写者は不明ながら、この粉本が制作されたであろう江戸時代後期に人気を博していた蕙斎の魚貝図を取り入れている点は、写山楼の八宗兼学の実態が、古画学習や西洋・中国の写実絵画の習得のみならず、版画を含めた当世流行の図様の獲得にまで幅広く展開をみせていたことを物語っています。

そしてそれを扇という、好事家同士の贈答品としてやり取りされる形で残っていた点からは、この魚貝図がやはり狂歌や俳諧を嗜む文人に好まれる図様として写山楼門下の間で共有され、書画会や句会のような文人交流の場で使用されていた実態を想定することができるのです。

松津家伝来の粉本資料は、およそ半数近くが原本作成者・書写者の記載がなく、また描かれた画題やその

が句の選集を行った彩色摺りの絵俳書で、見開き一丁分に一匹から数匹の魚貝図を描き、その上に、描かれた魚貝にまつわる句を配置しています。

本書の緋魚、鰈、榮螺、そしてあさり・蛤が描かれた丁を確認し、今回取り上げた松津家伝来の魚貝図粉本と比較

「略画式」シリーズは、『略画式』から始まり、『鳥獸略画式』『人物略画式』『山水略画式』『魚貝略画式』『草花略画式』の計六冊の絵手本のことをさし、全冊を通して、神羅万象のあらゆるモチーフを網羅的におさめています。

こうした蕙斎の「略画式」シリーズは、江戸時代後期の狂歌師、鹿都部真顔(しかつべのまがお)の肉筆の画賛や、その他俳諧摺物に本書群と一致する図様が使用されていることから、狂歌師や俳人などが、絵を習わずとも簡便な狂画・俳画の揮毫を可能とする手本帖の役割を果たし

原典が不詳のものも数多くみられます。今後、これらをより詳細に調査研究することで、身分をこえて多様な門下を抱えていた写山楼の、幅広い学習形態および活動実態がより明らかとなるでしょう。

(郷土博物館専門員)

ここで見られる足立の資料

足立の資料が展覧会に出展されます!

① 本田家文書 (郷土博物館寄託)

【場所】 埼玉県立嵐山史跡の博物館 (埼玉県比企郡嵐山町菅谷七五七)

【展示名】 「実相 忍びの者」

戦国時代の資料から、忍びの具体的な姿を解明する忍び・忍者ファン待望の歴史系展示です。

【会期】 8月7日(土) ~ 9月20日(月・祝)

* 本田家文書は戦国時代の忍者に係する第一級資料として全国的に有名な文書です。

② 準構造船 (足立区教育委員会所蔵)

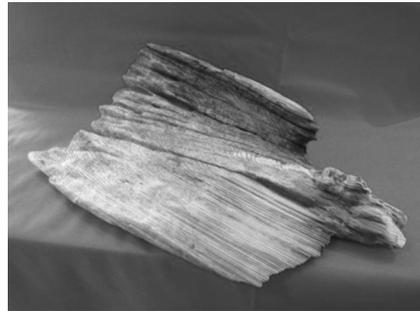
【場所】 埼玉県立ときたま史跡の博物館 (埼玉県行田市埼玉四八三四)

【展示名】 「運ぶー埼玉古墳群とモノの動きー」

古墳時代のモノの流通と運搬の方法を、発掘成果をもとに紹介する展示です。

【会期】 7月10日(土) ~ 9月12日(日)

* 準構造船は丸木舟に舷側板等の部品を組み合わせた大型の船のことで、伊興遺跡から船底が発見されました。八メートル程ある交易船だったと考えられています。



発掘された準構造船の船底 (普段は伊興遺跡公園展示館に展示されています)

あだち民具図典⑧

ハエ取り棒

■ ハエを取る 網戸のない家屋が

多かつた時代、また、たい肥や下肥を使っていた時代には家のなかに頻りにハエが入ってきました。噴霧式の殺虫剤が家庭用として一般に普及するのは昭和三十年代からで、それ以前は、ハエを取る道具を使って地道に退治することが試みられました。

粘着性のテープを吊るし、とまっただハエを捕らえるハエ取りリボンは戦前の生まれですが、今なお魚を扱う事業所などで重宝されています。しかし、現在では見ることもできない消えた道具もあります。

■ ハエ取り棒 ハエ取り棒は、吹きガラスで作られた長いフラスコにジョウゴがついたような作りをしています。なかに、半分くらい水を入れ、天井に留まったハエに、下からジョウゴを被せると、驚いて飛ばうとするハエが管の中をくるくると下がって水に落ちるのです。

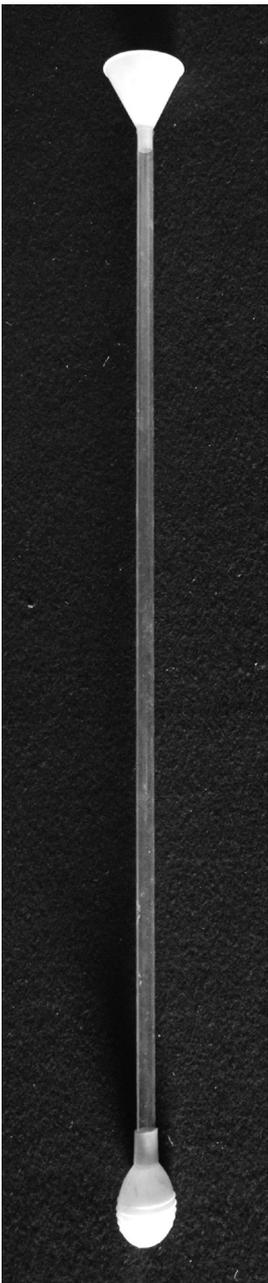
天井にとまるハエだけを専門に取る道具ですが、ハエの数が多かつた時代には有効な道具でした。もとは、すべてガラス製でしたが、プラスチック

ク製品の台頭とその簡易さにより改良され、ジョウゴの部分と下の玉の部分プラスチック製になり、取り外しもきくようになりました。その後、管の部分もプラスチックになります。

とくに下の玉は、溜まったハエをきれいに取り出すためにも取り外しができる方が便利です。ガラスの玉の部分を取ってしまい、ここにビニール袋を付けるという家庭での工夫も行われました。ガラス製品なので取り扱いが大変だったのでは想像されず、紐がつけられていて普段は、ホウキなどと一緒に壁につけて保管されていたようです。

現在では必要とされなくなり消えた道具なのですが、逆に、この道具が威力を発揮するほどハエが天井にとまることがあったということを表し、くらしの変化を感じられると思います。

(博物館学芸員 萩原ちとせ)



ハエ取り棒
全長 99cm
管の太さ 1.5cm(ガラス製)
ジョウゴの幅 7cm



はい、文化財係です ③〇

常善院不動明王像

の胎内文書

典勇山常善院神勝寺（大谷田一三三一―一五）は、元和年間（一六一五―二四年）に宇田川出雲が創建したと伝わる新義真言宗の寺院で、將軍がこの付近で鷹狩をする際の御膳所（休息所）にもなった名刹です。ご住職の関根眞教師から、不動明王像（文化財未登録）の修復に際し、像の胎内から文書が発見されたことご連絡があり、調査を実施しました。

今回はその調査結果をご紹介します。胎内文書の構成 発見された文書は、包紙と本紙三枚で構成されています。本紙は造立の趣旨などが書いてあるもの一枚（写真）と造立に関わった者たちの名が列記されたもの二枚となっています。

造立年の確定 写真を見るとわかりますが、「奉造立不動明王殊者二世安楽」・「于時萬治貳年己亥五月廿八日」などと書かれています。これまで不動明王像は江戸時代の作成であると考えられていましたが、はつきりとした年代は不明でした。しかし、今回の発見により、万治二年（一六五九）に造られたものであ

ることが確定しました。

常善院は元禄十二年（一六九九）造立の厨子入大日如来坐像がすでに文化財として登録されていますが、不動明王像はそれよりもさらに四十年前前に造立されていたのです。

常善院の住職 滝善成氏は、写真に本願（施主）として名が見える法印順覚は、常善院の住職で、墓碑から丙午年九月二十七日に没したとい、丙午はおそらく寛文六年（一六六六）だろうと推定されました。この点についても、本文書の発見により丙午が寛文六年であることが確定しました。

常善院への信仰 列記された人々は「惣合四百八拾人」と記されており、男女四八〇人もの人々が関わっていたことがわかります。こうした場合によく記される奉納金の額は記されていませんが、数多くの人々が不動明王像の造立に関わっていたことは、地域に根付いた常善院の歴史を鮮明に物語ります。

大谷田村の人々 法印順覚以外にもう一人本願と記されているのは、金子五右衛門直勝です。直勝という諱が書かれており、他の者より身分が高いといえます。大谷田村の名主として金子家が知られているので、直勝はおそらく名主だったと推定されます。

一方で、列記されている人々の中

で、金子三左衛門は「上ノ名主」、池内七左衛門は「下ノ名主」と注記されています。江戸時代後期に作成された『新編武蔵風土記』には、大谷田村の小名として「上」「中」「下」が挙げられています。おそらく、金子直勝は正式な大谷田村の名主、そして金子三左衛門と池内七左衛門は大谷田村の中の小地名だけで通じる名目的な名主だったのでしょう。

今後の課題 本文書には不動明王像を作ったのが「羽黒山大仏師慶存（尊）」であることが記されています。しかし、この仏師の詳細はまだわかっていません。また、現在の寺号は典勇山常善院神勝寺ですが、本文書には「川邊山常善院福生寺」と書いてあることも課題の一つです。

胎内文書の発見により、不動明王像の文化財としての位置づけがはっきりしてきました。今後、専門家と共に調査をすすめていきます。

【参考文献】滝善成「常善院」（『足立区文化財調査報告書』四、昭和四十五年）

※ご住職の関根眞教師に多大なご協力を得ました。お礼申し上げます。

（文化財係学芸員 佐藤貴浩）